

自然遊学館 だより

1996春 (No. 9)

1996. 4. 10

シリーズ『貝塚の昆虫(7)』

冬期に現われるガ類

昆虫のなかには、夏期高山の雪溪の上に現われるセッケイカワゲラ(セッケイムシ)や冬期雪上を歩いているニッポンユキガガンボのような変わりものが出て、いずれも雌雄とも昆虫の特徴であるはねを失っている。ガのなかにも変わったものが出て、暖かい季節を避け、わざわざ木々が落葉し、木枯らしが吹く時期、あるいは雪の降る中、または木々が芽ぶく前の気温が一けた代の寒冷期に飛びだすものはいくつかある。

大川の山口さんの採集品のなかから、それらを探して見ると、次のようである。[シャクガ科] クロテンフユシャク(12月下旬採)、ウスモンフユシャク(12月下旬採)、ナカキオビアキナミシャク(12月下旬採)、チャバネフユエダシャク(12月下旬採)、クロスジフユエダシャク(12月下旬採)、ニトベエダシャク(12月下旬採)、クロモンキリバエダシャク(3月上旬採)、[ヤガ科]ゴマダラキリガ(3月上旬採)、ノコメトガリキリガ(11月下旬採)、ウスキトガリキリガ(11月下旬採)、オオハガタヨトウ(11月下旬採)と、少ないながらも、いろいろあるものである。このうちクロテンフユシャク、ウスモンフユシャク、クロスジフユエダシャク、チャバネフユエダシャクの仲間は初冬から厳冬期

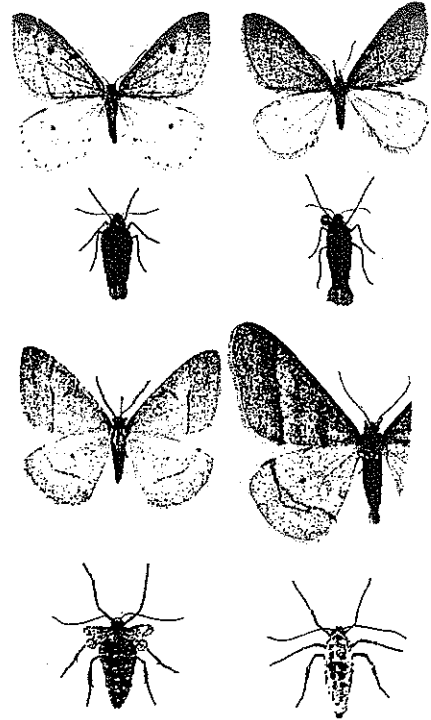


図1. 貝塚のフユシャク類

左上よりクロテンフユシャク(♂) ;
" (♀) ; クロスジフユエダシャク(♂) ;
" (♀) ; 右上よりウスモンフユシャク(♂) ;
" (♀) ; チャバネフユエダシャク(♂) ;
" (♀)

(中島, 1993より引用)

にかけて発生するので“フユシャク類”と呼ばれる。雄は薄いはねをもっていて、林内をひらひら飛ぶが、雌ははねが退化し、ときには全く無くなって飛ぶことができない。体型は卵を産むのに適応したずんぐり型。ひたすら地上や樹幹上を歩き回ることしかできない。

クロテンフユシヤクの場合をみると、この種は日本全国に分布する普通種で、平地では12月下旬から3月上旬まで、山地では11月中旬～12月上旬と4月中旬～5月上旬に分離出現するといわれる。幼虫は多食性でブナ、ニレ、カエデ、ツツジなどを食べるので、このような植物のある雑木林で、日没後雌は雌を求めて飛び回る。一方雌は木の根本や地上でコーリング行動を行ない雄を誘う。雄が近づき雌を見つけ、交尾カップルができると、木の枝や柵、擬木などに移動する。したがって雌は、早朝これら擬木などの上を注意して見回ると採集できる。雄は灯火に飛来する。

一般に、春先卵からかえったフユシヤク類の幼虫（シャクトリムシ）は新葉を食べ成長し、5月頃には老熟し土中に入り、まゆを作り、その中でさなぎになる。夏から秋にかけてはまゆの中でじっとして、寒い冬になるとさなぎの殻を脱いで成虫となり、飛び出すのである。フユシヤク類は、わが国からは35種知られているが、大阪府からは、箕面公園や枚岡公園で12種が知られているに過ぎない（宮武、1977）。

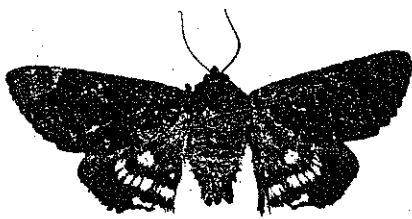


図2. 眼が赤色に輝くフラスズメ成虫

冬でも夜の気温が比較的高いと、灯火に飛来するガの数も多く、“冬もの”の絶好の採集日和となる。そういう時は冬の常連のほかに、はねや体が黒褐色をしていて、後ろばねに青紫色の帯のあるがっちりしたガが飛来することがある。これは

フラスズメといい、秋に羽化した成虫が戸袋の中や床下などにひそみ冬を越していたものが、陽気に誘われ出てきたわけで、しばらくはねを振動させていると、筋肉の収縮により体温が上がり、飛ぶことができるようになるのである。このほか成虫で越冬中のアケビコノハ、ウスズマクチバ、フキマルハキバガなどが集り座を賑やかにしてくれることもある。

（黒子 浩）

貝塚市内で目撃した昆虫

目撃日：1996年3月23日（土）

時間：14時30分～15時

地点：貝塚市木積（近木川右岸河川敷、竹田橋下流部）

メッシュコード：51354371

標高：85m

記録者：中谷憲一

目撃した昆虫

アメンボ 1♀成虫 水面遊泳
クリオオアブラムシ (多数)成虫・幼虫 刈りに寄生

目撃日：1996年3月24日（日）

時間：11時45分

地点：貝塚市新町（旧紀州街道）

メッシュコード：51355228

標高：5m

記録者：中谷憲一

目撃した昆虫

ルリタテハ 1成虫 飛翔中. 人家屋根に止まる

近木川調査記録（鳥類）

●1995年12月10日午前8時30分ごろ（晴）

河口～永久橋

町名：沢

流れ：おそい

状況：干潟

臭い：藻臭

濁り：にごる

川岸：コンクリート

川底：れき、砂、泥

周辺：人家、草地、水田、畑

カンムリカイツブリ 35羽

カワウ 1羽

ヒドリガモ 2♂, 3♀

コガモ 5♂, 3♀

イソシギ 2羽

コサギ 2羽

アオサギ 6羽

ユリカモメ 3羽

ウミネコ 1羽

イソヒヨドリ 1羽

モズ 1♂, 1♀

タヒバリ 1羽

ビンズイ 2羽

カワラヒワ 2羽

キジバト 1羽

ホオジロ 1羽

アオジ 5羽

ムクドリ 多数

ヒヨドリ 2羽

ハシボソガラス 4羽

ハシボソガラス 1羽

トビ 1羽

ハクセキレイ 4羽

セグロセキレイ 1羽

スズメ 多数

ドバト 多数

以上26種

備考：親と子供がアオサギ・コサギ・コガモに向かって小石を投げている。

●1995年12月18日午前9時20分ごろ（晴）

沢・近木川河口

カンムリカイツブリ 16羽

カワウ 1羽

ヒドリガモ 5♂, 6♀

コガモ 11♂, 12♀

ハマシギ 17羽

シロチドリ 3羽

イソシギ 2羽

ユリカモメ 8羽

ウミネコ 2羽

アオサギ 4羽

コサギ 1羽

タシギ 2羽

キジバト 2羽

モズ 1♂

イソヒヨドリ 1♀

ビンズイ 2羽

カワラヒワ 8羽

ムクドリ 8羽

ヒヨドリ 1羽

ハクセキレイ 3羽
セグロセキレイ 2羽
スズメ 多数
ドバト 多数
ハシボソガラス 3羽
トビ 1羽

以上 25種

備考：ユリカモメ 1羽が右翼に釣り糸をひっかけて河口を飛び回っていた。釣り人が捨てたテグスだ。この透明で頑強な強度を持つナイロンのテグスは、海水に溶けたり腐ったりすることはない。半永久的に砂浜に存在し続けるのだ。

一部の心ない釣り人達のモラルが、今問われている。

●1996年 1月15日午後 1時20分（くもり一時晴）
沢・近木川河口
（大阪府下のガン・カモ・ハクチョウ類の調査であったので、他の鳥はカウントせず）

コガモ 22羽
シロチドリ 2羽
タシギ 2羽
イソシギ 2羽など

●1996年 1月15日午後 1時（くもり一時晴）
沢・二色の浜

ヒドリガモ 12羽
カルガモ 10羽
カンムリカイツブリ 7羽
カワウ 1羽

ハマシギ
シロチドリ
ユリカモメ
ウミネコ
カモメ
セグロカモメ
オオセグロカモメなど

備考：二色の浜の砂浜で、左翼に釣り糸がからまり、あまり飛べないセグロカモメ 1羽を見た。

釣り糸を捨てる釣り人がいる限り、水鳥たちの被害はなくなる。

●1996年 2月11日午前 8時40分（晴）
沢・二色の浜

スズガモ 1♀ 二色の浜で見たのは初めて
カルガモ 8羽 6羽はテトラポットに一列をなして休み、2羽は砂浜に上がりアナアオサを食べていた。

カンムリカイツブリ 1羽
カワウ 1羽
ユリカモメ 18羽
ウミネコ 4羽
セグロカモメ 9羽
シロチドリ 14羽

ハマシギ 15羽 このうちの1羽は右足半分がなく、砂浜を左足で飛びはねるように歩いていた。

ハクセキレイ 2羽
ハシボソガラス 1羽

以上 11種

●1996年2月11日午前9時30分（晴）

沢・近木川河口

カンムリカイツブリ6羽
ヒドリガモ12♂, 14♀
コガモ12♂, 18♀
シロチドリ2羽
イソシギ2羽
タシギ2羽
ユリカモメ4羽
セグロカモメ1羽
アオサギ4羽
ダイサギ1羽
コサギ2羽
ゴイサギ（若鳥）1羽
イソヒヨドリ1♀
ヒヨドリ1羽
ムクドリ8羽
カワラヒワ2羽
ビンズイ2羽
アオジ5羽
ホオジロ1♂, 2♀
キジバト2羽
ハクセキレイ3羽
モズ1♂
ハシボソガラス4羽
トビ1羽
スズメ多数
ドバト多数

以上26種

備考：シロチドリ2羽のうち1羽は釣り糸がぐるぐるまきに翼にからまっていた。

（日本野鳥の会大阪支部会員 飯田 政治）

遊学館で飼育している昆虫<1>

遊学館では、去年から、3つの飼育ケースで、オオカマキリ、カブトムシ、クビキリギスを飼育しています。オオカマキリは卵囊の中で卵越冬し、まもなく4月の中頃からふ化し始めると思います。ふ化の時間は早朝ですが、うまくいくと開館（午前9時）直後に、ふ化の様子が観察できるかもしれません。オオカマキリは共食いをするので、去年の飼育でも、飼育ケースの中で成虫まで発育したのは、1個体だけでした。今年は餌を増やして、もう少したくさん成虫を育てたいと考えています。

カブトムシは、約10個体の幼虫が腐葉土の中で越冬し、7月の下旬頃には成虫が羽化すると思います。クビキリギスは、日本のキリギリス類では珍しく成虫越冬で、5個体の成虫が冬を越しました。飼育ケースの中には、緑色と褐色の個体がありますが、同じ種類です。

冬の間は、オオカマキリは卵囊で、カブトムシの幼虫は土の中にもぐっていて、クビキリギスの成虫もじっとしているだけだったので、「なに飼育してるんかわからんな」、「おもしろいな」と思った方もおられるでしょうが、春以降は、もう少し楽しめるようになると思います。今年は、さらに飼育ケースを増やす予定です。新顔の昆虫も見に来て下さい。

（岩崎 拓）

遊学館で飼育している昆虫<2>

遊学館で飼育している昆虫たちに、4月5日からガムシが加わりました。

ガムシは、体長が30～40mmくらいで、少し緑がかった黒色をした甲虫のなかまです。水田や水草の豊富なため池などに生息していて、成虫は水草などの植物質のものを食べますが、幼虫は肉食性です。

流線型の体型で、一見するとゲンゴロウに似ていますが、分類上はそれほど近い関係にはありません。ゲンゴロウは触角が糸状で長いのに対して、ガムシでは太くて短いの、なれると見分けるのは簡単です。また、泳ぎ方もよたよたしていて、ゲンゴロウのようにすいすいとはいきません。

かつてはどこでも見られた代表的な水生昆虫ですが、今ではゲンゴロウやタガメなどとともに非常に少なくなってしまいました。大阪府下では北部の茨木市や能勢町などには今でもかなりいますが、南部からの確実な分布は知られていません。

遊学館で飼育している個体は、貝塚市堤に在住の橋本律子さんからいただいたものですが、もらいもので産地はわからないとのこと。

(大築 正弘)

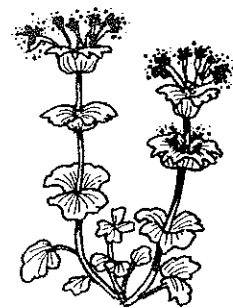
雑草案内

3月にはいると3、4日おきに雨。ひと雨ごとに春を感じワクワクしませんか。何日か前に通った道、沈丁花の香りがし、いつのまにかモクレンの花がひらき、道端の雑草も小さな花をつけている。冬のあいだ、寒風にさらされながらひっそりと咲いていた草々も今は、のびのびと咲いているよう。

しばらくお休みしていました〔遊学館周辺の植物〕コーナー、春の草花を展示しています。どこにでも咲いている雑草、よく見かける草花ですが、散歩の道すがら、季節の移り変わりを楽しんでみませんか。

ナズナ、タネツケバナ、ハコベ、オランダミミナグサ、ハルノノゲシ、ノボロギク、マメカミツレ、ホトケノザ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、ヨモギ、ヤエムグラ、スズメノカタビラ、オオイヌノフグリ、カタバミ、キュウリグサ、アメリカフウロ

(湯浅 幸子)



近木川探検隊の1年を振り返って

1995年4月22日の自然遊学館・グリーンカレッジの行事「春のハイキング」のときから「近木川探検隊」が生まれました。これは、1995年2月25日に開催された貝塚市主催行事「市民フォーラム人と自然との共生」のとき、パネリストの嘉田良平さんから、「近木川をきれいにしようという、市民の意識づくり」のための提案を受けたものです。誰も意識して見なくなった近木川を「見る」ことから始めよう、足元から近木川環境を見つめよう、そのための探検隊をつくろうという提案です。

後に「近木っ子探検隊」と名称を変えてしまったため、名称から「近木川を探検する」という目的がわかりにくくなったように思います。たとえば、「ちびっ子探検隊」というのは、「ちびっ子を探検する」のではなく、「ちびっ子で組織された探検隊」の意味です。「近木っ子」というのは近木川を意味するのではなく、「近木川流域で生まれ育った人たち。近木川流域で暮らす人たち」の意味です。ですから、「近木っ子探検隊」は、「近木川にはぐくまれた人たちで組織した探検隊」の意味に取られかねません。

名称はどうかあれ、「近木っ子探検隊」は「近木川を探検する」のが目的であることに変わりはありません。「近木っ子探検隊」の実際の活動は、自然遊学館・グリーンカレッジの、「近木川を探検する」行事として組み込むこととなります。

ところが、近木川探検を行事として計画する場合、近木川は「汚い」場所や「危ない」場所だけでなく、本来の目的である「近木川の探検」を行うのは困難です。結局は、橋の上から川を眺めたり、

近木川の周辺を観察するだけに終わってしまいます。1995年度の「近木川探検隊」の行事の多くがそうでした。

行事の企画のときに「汚い」「危ない」という言葉を耳にし、また私自身も口にすることがあるのですが、多少なりとも川に関わってきただけに、たいへん心苦しい思いです。昆虫のことを「汚い」とか「危ない」と言う人がいます。それは事実です。ハエやゴキブリのように、不衛生な場所から私たちの食卓などへ雑菌を持ち込む昆虫がいます。病原体を媒介したり、強い毒性で、人を死に至らしめる昆虫がいます。だからといって、すべての昆虫を遠ざけていたのでは、昆虫の世界が解るはずがありません。昆虫の世界の巧妙さに感動することもあります。

同じように、近木川を「汚い」「危ない」と遠ざけて、近木川が解るはずがありません。「汚い」と呼ばれる近木川河口部には、何種類かのカニがすんでいます。そのカニか魚をねらっているのか、護岸にはアオサギがよく止まっています。「ヘドロ」と呼ばれる泥の中から、コサギやハシボソガラスなどが何かをついばんでは食べています。堆積した土砂の中にムクドリがくちばしを突っ込んでいます。「汚い」近木川河口でも、ちゃんと暮らしている生物がいるのです。

少なからぬ生物が生息している川なのに、どぶ川呼ばわりされたり、死んだ川のように言われるのは腹が立ちます。それは、何度か近木川を歩いてみて、近木川の「個性」が見えてきたからかもしれません。実際に川の中に足を踏み込んでみると、いろいろと解ってくるものがたくさんあるのです。

高知県の四万十川などから比べると、近木川は

不細工な川かもしれません。たとえ不細工な川であっても、私にとって、近木川は個性的で魅力ある川です。

近木川に愛着を持つ人は、近木川で遊んだ体験の持ち主や、仕事など何らかの関係で近木川に足を踏み入れた人だと思います。近木川の「個性」に触れた人たちだと思います。ところが、「近木川探検隊」ですら、近木川を「汚い」「危ない」と、近木川に足を踏み入れることに二の足を踏んでいるのです。これで「近木川探検隊」の目的が果たせるのでしょうか。

私にはいくつか、思い出多い川があります。川という、独特の魅力にあふれた空間で遊ぶ体験ができたことを幸運に思います。最近はその川に行く機会がなくて、鉄橋を通過する電車の中から眺めるだけのことが多くなりました。遠くから恋人を見ているような、そんなつらい気持ちです。もし私にとって、川は橋の上から眺めるだけのものであったら、そんな気持ちになることはあり得ません。

「近木川探検隊」も、「汚い」「危ない」と、橋や川べりから眺めるだけの活動を続けていたのなら、心から近木川を愛する人は育ってこないでしょう。「近木川を傷つけるものは許さない」という気概の持ち主は、われわれより若い世代からは、いなくなるでしょう。

さまざまな人が参加する行事として取り組むには、川は危険の多い場所です。しかし、ほとんどの危険は予知することができます。その危険を回避する手だてもあります。それなりの装備でのぞめば、一定の安全は確保できます。現状では、それなりの装備に費やす予算や人手が不足していて、川と接する行事として「近木川探検隊」は成立し

ていません。「近木っ子探検隊」への改称は、その後ろめたさを少し和らげるものではありませんでした。

2年目を迎えた「近木っ子探検隊」は、本来の目的である「近木川探検」に少しでも近い活動ができますように。

(中谷 憲一)

自然遊学館 TEL. 0724-31-8457

貝塚市二色3丁目26-1

開館時間 午前9時～午後9時

休館日 火曜日